

「シスター・シェリル」では、サビで エモーショナルなGコードを見つけた

—ハービー・ハンコックが、今年の春、ブルーノート東京に出演した時、ジャズライブのためにセミナーをしてくれて、その中でトニーさんの作曲した「シスター・シェリル」を取り上げて、ピアノで弾きながら、ハーモニーのことなどについて話してくれたんです（P.46~48参照）。ここに、その時、ハービーさんが弾いたピアノを譜面にとったものがあるのですが、これを見ながら、トニーさんが、どのようにこの曲を作曲したのか話してもらえますか？

トニー：まずメロディが最初に僕の頭にパッと浮かんできたんだよ。ほとんど僕を書く曲のメロディはそうなんだ。でも、作曲のやり方としては、「メロディから浮かぶ」っていうのが、一流のやり方っていうものだろう？

（楽譜を見ながら）この1小節目から2小節目にかけてのメロディの音は、F#ED#F#BD#とくる。これらの音符をそのままタテに並べてハーモニーとして使ってみるとどうなる？ BD#F#のBメジャー・コードになるよね。Eの音だけはBメジャーの中には入っていないけれど、あとのメロディの音は、みんなBメジャー・コードの音だ。

だから、このハーモニーは、ただメロディの音を重ねて自然にメロディと調和させただけなんだ。僕の耳には、このサウンドがピッタリきた。

そして、実はこのあと少しハーモニーに手を入れた。Bメジャーの3度の音のかわりに、2度（9度）のC#の音を重ねてみたんだ。メロディが3度のD#を4拍も伸ばしているから、ハーモニーにD#の音を重ねなくてもいいと思ってね。

言いたかったことは、最初にBメジャーのコードがあって、その上にメロディを考えたのではないということさ。それだと、すごく、限定された作曲法ということになってしまう。

8小節のモチーフが続いてサビに行く。このサビがすごくこの曲では重要だ。

サビの頭のコードはGメジャー・コードだ。しかも、すごくエクスプレッシヴな表情の豊かなGコードだよ。このGコードの響きがほんとうによかったんだ。なぜかわかるかい？ Gメジャーのコードが、Bメジャー・スケールのスケール上にはないからだよ。

GメジャーのG、B、Dは、Bメジャー・スケール上ではG# BD#になるだろう。

ずっと最初からプレイしてきて、この場所で、このコードを弾くと、なぜか、とてもエモーショナルなインパクトのある……うーん、



なんて言ったらいいかな、わかるだろ？

とにかく、この部分がこの曲において最も大きなポイントになった。

そして、僕は次にさらに大きな問題にぶつかったんだ。サビに入ってからの4小節。そこまではすんなりと書けたんだけど、そのあと、ほんとうにどこに進んだらいいのか、見失ってしまった。そこから先へ行くのに、ほんとうに時間がかかったんだよ。この部分が自分なりに納得して落ち着くまで、とても時間がかかった。

これが、「シスター・シェリル」を作っていた時の創作ノートというところかな。

もちろん、ハーモニーがメロディを生むきっかけになることもあるし、メロディがどんどん新しい場所へ僕を連れていってくれることもある。

—この曲は、キーがBメジャーですが、たとえばB^bキーの楽器であるトランペット・プレイヤー等にとっては、とてもむずかしいキーなのではないでしょうか？

トニー：僕はそんなことはぜんぜん気にしないなあ。というか、僕はそれぞれの楽器のことを考えて作曲したりはしない。僕が作曲する時、その方法は、常に“The Song of Music”ということに集中しているわけさ。

—キーがBメジャーであるということに何か意味があるのではないかと思うのですが。

トニー：うん。その通りだ。まず、とってもブライトで明るく輝くサウンドを、このキーは持っているということだ。

他のキーに転調してしまっただけは、このブライトさは失われてしまう。キミも一度、Bのキーで何か作曲してみろよ。どんな響きが得られるか、その響きをキミがどう感じるか？

僕はこのキーが大好きなんだ。

—ハービーさんがこの曲をピアノで弾いた時、「この曲にはコード・シンボルを超えた素

晴しいモーダル・フレイバーがある」と話していたんですが。

トニー：Great! 最高だ! ハービーがそういうふうには言ってくれたの？ うれしいね。

この曲は、とってもオープンで、ハーモニーもフレキシブルなんだ。プレイする人間が自由に自分なりのテイストを加えることができる。ハービーのような素晴らしいプレイヤーなら、この曲のフレイバーをほんとうに感じしてくれるんだ。わかるだろ？ メロディが心地よくハーモニーの上に乗っかっているんだけど、メロディもハーモニーも、どちらも僕にとっては真実のさ。

ところで、このミュージック・ノート、僕にくれないかなあ。これは、みんなハービーが弾いたものなんだろう。「ネフェルティティ」が載ってるね。コピーでいいから。

—もちろんですとも。ところで、トニーさん、コード・ネームの書き方についてお聞きしたいのです。バンドのメンバー、特にピアノのマルグリュー・ミラーは、メロディとコード・ネームを見てかなり自由にヴォイスンクしているんでしょうか？

トニー：単純なコード・ネームの書き方とはちょっと違うかもしれない。できるだけ、立体的に、というかヴィジュアルにつかみやすいようにくふうしているんだ。

たとえば、さっきの「シスター・シェリル」のサビの1小節のコードは、G/Bというふうに書く。ベース・ノートがBだということをはっきりさせるために。Gのコードの中にBの音が入っているけれど、その音がベースにあるということをはっきりわかってもらうためにね。

そのあとは、ピアニストが自由にヴォイスンクしてもかまわない。僕が示したコードの立体的な構造を理解した上でなら、彼自身のテイストを付け加えてもかまわないんだ。

僕は今、ストリングスを勉強している。それが今の僕に課せられたことだ。“勉強中”なんだ。

—作曲する時はピアノを使うのですか？

トニー：ふつうはね。でも、頭の中で鳴り出して、歌いながら作ることもあるよ。そんな時は、わざわざピアノの前にすわって作曲するなんてことはやらない。ただ歌いながら、アイデアを発展させて、フォームを考える。

でもピアノの前にすわって、単にあるハーモニーを弾いてみて、そのハーモニーの響きをハミングすることもよくあるんだ。そんな時、コードをハミングしてるって感じになるんだけど。その響きを口ずさんでいるうちに思わずメロディが生まれてくるんだ。「GEO ROSE」という僕の曲があるだろう？ あれはそういうふうにして作った曲だ。

でも、楽器から離れている時に頭の中で鳴り出すメロディというのは、なかなかすごいよ。毎日頭の中でメロディが歌っている。

僕は小さなマイクロ・カセット・レコーダ

ーをいつも持ち歩いている。どんな時にでも浮かんだメロディを録音できるようにね。

—ハービー・ハンコックが、マイルスのバンドに入って、トニーさんと出会った頃、いろんな音楽、特にジョン・ケージやシュトックハウゼンのような現代音楽を、あなたから教わったと話していました。その頃の話を話してもらえますか？

トニー：ハービーがそんなこと言ってたのかい？ 彼がそんなこと言うなんて、実にいい奴だよな。

とにかく、僕はいろんな音楽を今も聴いている。でも、たしかにニューヨークにいた頃は、ほんとうにいろんな音楽を聴いていたなあ。でも、意識してそうしていたというのではなくて、自然に聴いていたんだよ。

きっかけは、1960年の初めだ。その頃はボストンにいた。ボストンには、実にさまざまな実験音楽をやっている連中がうようよいたんだ。ボストンは大学の街だろう？ なんだか

街全体がインテレクチュアルな感じでき。

ボストンの連中は、何かとうんちくをたれて、物事をこむずかしく考えたがっていた。その頃、ボストンにいたそういう連中というのは、みんな、何でも可能だという思い込みが持てる、そんな状態にあったんだ。僕はそういう環境をうまく利用したのさ。ジョン・ケージはそういう中でも象徴的な存在だった。

—今でもよく聴いたりしているんですか？

トニー：以前ほどではないけれども、あいう音楽は大好きだ。今よく聴いているのはと云えば、そうだなあ、もう少し古い時になるけれど、エドワード・エルガー (Edward Elger) っていう作曲家がいるんだ。「チェロ協奏曲」(1919年) という曲を書いたりしている。それからシュトックハウゼンは今もよく聴いている。

今いちばん熱心にチェックしているのは、エリオット・カーター (Elliott Carter) とミルトン・バビット (Milton Babbitt)

ハービー・ハンコック
プライベート・ピアノ講座

出前編

ハービーによる「シスター・シエリル」の構造分析

トニー・ウィリアムスが「シスター・シエリル」という曲を書いているけれど、あの曲には、素晴らしいモード・レイバーがある。コード・シンボルだけでは、この曲は演奏できない。

最初のコードには3度がない。3度を入れて弾いてみると、まったくレイバーがそこなわれることがわかるだろう。もう違う曲になってしまう。コード・シンボルとしては同じでも、響きが違うんだ。

ハーモニーに3度がないために、メロディで3度が入ってきた瞬間、実に微妙な変化が生まれるんだ。

これは作曲者のトニーが、まさにこの瞬間に3度の音を入れたいと思ったんだろうな。コードとして最初から3度が入っているのではなくて。

4小節目では、2つのトライアドが使える。B Δ とA Δ だ。7thや Δ 7thは使わない。

どうしてだかわかる？

この8小節は全体を通してBコードの響きが鳴ってるんだ。ブリッジ(サビ)までずっと鳴っている。その大きな響きの中で、

小さなデリケートな変化が、瞬間瞬間に含まれている。その変化が見つかった瞬間こそ、レイバーなんだ。

僕には、このレイバーが、アラビア音楽とつながっているように感じられるよ。

とにかく、レイバー、これこそ最も重要なものだ。多くのミュージシャンは、そ

のことに気づかない。ただ、コード・シンボルをスケールだけでわかった気になっている。

音楽というのは、そんなふうにはいかないよ。それぞれの曲が、それぞれの違ったレイバーを持っているのだから。

(ハービー・ハンコック談)



TONY WILLIAMS INTERVIEW

SISTER CHERYL

シスター・シェリル

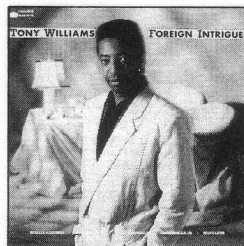
Music by

Tony Williams

Piano Solo Arrange by

Herbie Hancock

採譜：岡本 洋



▲トニー・ウィリアムス
「フォーリン・イントリグ」



▲ウイントン・マーサリス
「マーサリスの肖像」

The first system of music features a treble clef staff with a triplet of eighth notes (F#, G, A) followed by a quarter note (B), a half note (C), and a quarter note (D). The piano accompaniment consists of four measures of chords in the right hand and single notes in the left hand, all in a key with one sharp (F#).

The second system continues the melody with a triplet of eighth notes (B, C, D) followed by a quarter note (E), a half note (F#), and a quarter note (G). The piano accompaniment continues with four measures of chords and single notes.

Bridge

The Bridge section begins with a triplet of eighth notes (G, A, B) followed by a quarter note (C), a half note (D), and a quarter note (E). The piano accompaniment consists of four measures of chords and single notes.

SISTER CHERYL

The first system of musical notation for 'Sister Cheryl'. It consists of a vocal line in the upper staff and a piano accompaniment in the lower staff. The piano part features a series of chords in the right hand and a bass line in the left hand.

The second system of musical notation. The vocal line continues with a melodic phrase. The piano accompaniment includes a bass line with a triplet of eighth notes and various chords in the right hand.

The third system of musical notation. An annotation 'The first chord' points to the first chord in the piano accompaniment. Another annotation 'Melody has 3rd Note' points to a triplet of eighth notes in the vocal line. A circled 'X' is placed over a chord in the piano part with the text 'Harmony doesn't have 3rd Note'.

The fourth system of musical notation. An annotation 'Triads' points to a group of chords in the piano accompaniment. Another annotation 'no 7th not m7' points to a chord marked with a circled 'X' and a triangle symbol.

The fifth system of musical notation. An annotation 'Arabic' with a downward arrow points to a specific melodic phrase in the vocal line.

